「一秋」の実り 1

田宮 治

あどけなかった仔犬たちも山びきを重ね、汗と泥まみれの訓練が効を奏し、実戦で見せつける驚くほどの成長には目を見張る。とても一才にもならない若犬が使いこなせる芸域ではない。

「これならどうだ！」といわんばかりに、われ先に新芸を見つけ出し、進化しているようで、山で出くわすどんな猪でも、ものの見事に吠え付き、咬み止め、時には駆け付けるまでに咬み殺してしまうまでになっている。

思えば、先犬が大猪との戦いで命を落としたり、大猪と引き換えに兄妹犬を失ったり、涙の出る辛い、悲しい出来事もあった。しかし、その無念さまでも全犬が引き継ぎ、私を慰めてくれるように元気そのもので、出会うチャンスはことごとくものにしているし、素晴らしい実力が付いてきた。

ここまで登ってくるのには他人様に言えない苦労や困難の連続であったが、この仔犬たちを信じ、猟野を駆けめぐり這い回って、あくまでも天性の猟能を目いっぱい引き出すことに専念してきたのである。

若犬たちの猟場での姿を見つめながら、まとまり具合や犬たちの芸の特徴、闘争心。そして、何よりも大切な「主人の指示に乗って思ったとおりに移動する時の間の取り方」と「戻り」までも注意して、残らず創意工夫して登りつめてきたのである。まさに勝負をかけ続け、挑み通してがんばってきた。

「一秋＝十九年度猟期」は、あと二日で終わりである。かけがえのない二日間を全力を尽くし、ビシッと決めることで「一秋（一ノ矢犬群の成長）」の集大成とする。その覚悟で千葉で名のある、通い慣れて気心も知れている石井親方のグループに出猟することにしたのである。

このグループには四年くらい前から仔犬の縁でお邪魔するようになり、私の犬群で毎年それなりの成果を残している。一軍犬群はもとより、今日連れて来ているラン号やゲン号も顔なじみで、一芸の素晴らしさは猟友たちのよく知るところである。

改めて、わが犬群の仕上がり具合や成果を取り立てていうことはないのだが、今猟期は特別もので、『三秋を見ろ』とのタイトルで全国に紹介しているとおりである。目下、私も若犬たちも頂点に挑戦中であってみれば、当然のこと、特別な思いで今猟期を位置づけ、どうしてもこの「一ノ矢の実力」をベテラン猟友の見守る実戦の場で、「一秋の成果」を証明したかったのである。

泣いても笑ってもの二日間は泊まりがけなので、入念な準備をする。今朝の海ほたる（千葉と川崎を結ぶ橋）は無風にて快晴。またとない猟日和である。ありがたや、天気まで味方している。私は千葉に出猟するたびにこの橋で天気を読むのであるが、これは千葉の山々は海に近いため風の強い日が多いのである。風は雨に次ぐ、猟でのくせ者なのである。

車には一ノ矢のブル号（二代目）、ヨシ号、富士美号、シロ号の四頭と、先犬のラン号、マロ号、ゲン号を乗せているが、あくまでも一ノ矢四頭が主力である。先犬三頭は一日一頭入れて、さらなる犬群のまとまりと、終猟期の追われ慣れた、特にガリ（オスの大猪）に対する私の気遣いである。

本物の実力

犬であれ、猟人であっても、たまたま出る実力では心もとない。いつ、いかなることがあろうとも、当たり前のように見事やり遂げるのが本物の実力である。

確かに猪猟も水もので、紙一重が勝負の分かれ目となるのも事実である。そんな意味からも、「ああならば……」とか、「こうだったら……」などの言い訳は絶対にしたくない。たとえ実戦の場がどこであろうと、誰が見守る中であっても、必ず実力が出し切れるようにがんばり続け、挑み続けてきたのである。

正直な話、私が基本としている単独猟では十二月頃からめきめきと力を付け、実戦での咬み芸も、鳴き続ける気力も、山をひっかきまぜて探す、起こしまでも、もう若犬のやる芸域ではない。その様子は、大一番（『狩猟界』平成二十一年三月号参照）を境にどんどん登りつめているようで、すでに一軍犬群にせまり、超えそうな勢いである。当然のように、一〇〇キロくらいまでの猪ならば私の予想どおり「あそこで出して……」「ここで止め切る」ことができるようになっている。

猪など、獲ろうと思えばいつでも獲れる状況にあり、安心して戦いぶりを検分、すぐそばから指示も出せるようになっていて、カメラで追う余裕も持てるようになっていた。

「なあに、大丈夫さ……」「自信はある」。たとえどんな猟場に立とうと、置かれた状況がどうであろうと、必ず猪を探し出し、止め切って、「完勝」といきたい。ふりかかるプレッシャーをはね除けて、いつものとおり猟友たちの見守る中で一級品の一芸を披露することで、見事「一秋の実り」を証明したいと思っていたのである。

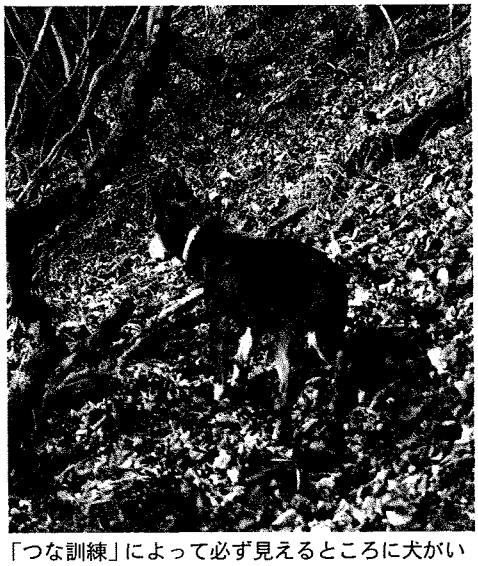
そのために私は二度と戻らない、かけがえのない二日間を、特別なこだわりを持って一ノ矢犬群の「発表会」であると決めた。

単独猟が基本である私が何度も言い続けてきたとおり、その成果は愛犬の実力次第である。ただ一人で愛犬たちの力を結集、堂々と勝利することは、グループ猟や二、三人での猟とは比較にならないほど難しいのである。

そんな困難さも楽しさにして乗り越えてきたのである。どんな理屈で説明しようと「単独猟師」と名乗るからには、どんな猪でも一人で獲れるのが「達人」であり、「達人」をがっちりサポートするように、どんな荒猪でも難なくどんどん獲らせてくれるのが、やはり「名犬」である。私は常々そう思っている。くどいようだが、二人とか三人で獲れたのでは納得などできないし、あくまでも一人での成果である。

立派な理論では説明できない単独猪猟犬の条件は簡単なことで、「一人でも猪が獲れる」ことであ

一にも訓練、二にも訓練、「つなひき」なくして名猪犬はない。来る日も来る日も終わりのない挑戦だ



「つな訓練」によって必ず見えるところに犬がいる。車から放犬、猪を狩って、帰りはいつも主人と一緒。これが単独猪犬の条件である

る。成果主義は好きではないが、思ったとおりの芸を繰り出し、犬芸を見ているだけで楽しくなるような一流猟技を教え込むために日頃鍛え上げてきた結果が、猪が獲れる犬になるのである。

猪犬である以上、本物の実力とはそんなもので、猪が獲れてこそ、その価値が生まれる。私にとっての「一秋」は、まだあどけない仔犬の綱びきに始まって、山入りさせ手順を尽くして猪に当て、苦労して実戦で磨き上げてきた真剣勝負の場は訓練所のようなものだ。その成果を発表し、見ていただき検証してもらうのがこの大切な二日間、二月十五日の発表会である。

何がなんでも、日頃の成果をそのまま示したい。当然のこと、私は火の玉となり、猪猟の鬼となっていた。そんな気持ちを猟友には悟られないように平常心に努め、あくまでも発表会で我が子の姿を見守る親心でありたかったし、嫌な気分にさせず楽しい中で終わらせたい。どこまでも想い出に残るような納得のいく猟を目指したのである。

とどめの一戦

大猪にとどめを刺すような強烈な猪猟を断行して、ベテラン猟友たちの度肝を抜くほど若犬群には日頃の実力を爆発してもらって、咬み止め犬による本物の猪猟を見ていただき、味わってもらいたい。そんな思いから、今日だけは他の犬持ちには悪いが、私の犬たちだけでやることを告げ、全犬七頭を放して、お祭り騒ぎの発表会となったのである。

「なあに……大丈夫だ」「失敗することなど絶対ない」。昨日だって鹿一頭と猪二頭の成果で、その二頭の猪は斉藤氏が駆け付けてくれるまでに完全に咬み倒していて、とどめ刺しを入れるだけの完璧なものであった。全犬乗り切っている。

かねがね思っている私の存念は、単独猟では当然のこと、死力を尽くしても必ず自分で撃たねばならないが、グループ猟は「発表会」である。何とか犬群の一芸を検分していただき、出た猪はみな猟友に撃ってもらいたい。止め切った猪でも私が撃ちたいと思ったことはなく、すぐそばにいつもいて、山案内をしてくれている斉藤氏に「どうぞ、ゆっくり寄って撃て！」と言っている。何とか止め犬での猪猟の醍醐味を味わってほしいと思っている。

そんなことまで察していたように、斉藤氏が選んでくれた猟場は今猟期も良い成果の出ている、私の気に入っている山である。今日二月十五日は平日なので、親方石井氏は仕事で出猟できない。自分の無線機を私に手渡してくれた。彼のその思いを大切に受け止め、今日一日を勢子長として、親方の代わりを務めたいとひそかにそう決心していた。

有終の美

「終わり良ければすべて良し」。「一秋」を決定づける大一番を前にして、猟支度も万全に、全犬に手入れした真新しく見える発信機を付け、タツ付きを確認。いつものように全犬を車から放しての入山となった。山案内の斉藤氏もすごく張り切って二〇メートルくらい先を登っている。私はその後に続き、犬群の様子を見ながらゆっくりと小峰伝いに登り始めた。犬群は一団となって小峰の両側をかき混ぜるようにせわしなく動いている。

この猟場は千葉特有のV字谷のストンと落ちる崖が多く、登るところも小峰伝いで、山の中腹は急斜面である。しかもボサ藪やツルが茂って見通しが悪く、横切ることもできない。止め猪に寄るにも撃つのも大変なところである。そんなことでライフルは禁止になっている。単独猟ではこの崖の多い、茂みだらけの難所から猪を見付け出し、止め切る犬でないと、まず勝ち目はない。

幸いなことに、今日は七名のタツが下で待ち受け、がっちりとガードしてくれているので、猪は袋のネズミのようなものだ。

それというのも、この猟場は大峰が小川と平行し、大峰から落ちる小峰はどれもこの小川がどん詰まりであり、川沿いに五名のタツ

が適当な間で並び立ち、待ち受けている。小川は長靴で渡れる清流で、幅は二〜三㍍くらいだ。この小川に沿って林道が頂上近くまで上っており、道の左側は山田まである、猪には良い環境である。

大峰の反対側には国道と民家があり、どんなに名犬級の犬でも、足の延びるものとか、危険な犬では使い物にならない。ちなみに、千葉の猟場はどこに行っても猪山は人家のすぐ近くで、狩り進んでいると飼い犬がワンワン鳴いて反応するのはよくある。「安心」「安全」の「猪に強いだけの犬」でないと、とてもじゃないが安心して犬など放せないし、猪猟どころではなく、納得の猪猟はできないのである。

斉藤氏が「放犬しましたよ。頼みます」とタツの全員に告げている。犬群は早くも猪臭に付いたようで、全犬が茂みに消えた。

欲張ったというか、用心のために一峰奥からこの小沢に下りた時である。「猪臭があるようだね」と斉藤氏が私を振り返り、「あの小峰を登るか」と登り始めた。目の前でブル号とマロ号が鳴き出した。あっという間にヨシ号もそれに続き、全犬一団となって、すぐ近くを小沢の奥に向かって追い鳴きである。

「しまった」。小峰を下りてくる途中で猪は既に起きていたようだ。二人の会話もタツとの連絡も聞いていたらしく、タツとは反対の奥に逃げているようで、なかなか止まらない。

「二頭だよ」と斉藤氏が駆け下りて来た。この奥は崖で猪は登れないはず。必ず止めようと二人で小沢を奥に走った。犬群の鳴き声が変なので、近寄ると崖下で全犬が右往左往している。猪の姿はない。近寄って猪足をよく探すと、何と目もくらむような崖にわずかに残る出岩の猪道に乗り、見事上に逃れていた。さすが、この地に生きる猪のすごさである。

「こんな手もありかよ」と二人は思わず顔を見合わした。気を取り直し、全犬を呼び戻し、さっき登ろうとした出峰に戻ったのだが、マロ号とシロ号は「逃してなるものか」というように呼び戻しもきかず、遠回りして奥に追って行った。その先にタツがいるわけでも、止めたとしても大峰の頂上で、ここを越えるわけにもいかない。

「仕方ない」「五頭で十分だ」「先に進みましょう」。タツにそのことを告げ、出峰を行っては戻り、下っては登り、ちょうど一番タツの真上の大峰筋に立っていた。さっきの二頭は見切った猪ではない。

ここからが「子連れ猪がいるはず」の本場である。大峰からは何本もの小峰が小川に向かって下りていて、猪はどの小峰から飛び出しても小沢伝いにタツの目の前に落ちて行くところである。おまけに、その小川を渡り、反対側の山に向かう林道側は二〜三㍍くらいのコンクリートで固められているので、猪は小川を下流に走ることになる。タツはその猪を撃つのだから見通しも良いし、この上ない条件なのである。

小休止して一息入れ、ドリンクで喉を潤し汗を拭く。「いなかったね」と斉藤氏。この時期になると猪は一頭ではなく、集まっているのが普通である。「これからですよ。団体さんが飛び出すから……」と元気付けるが、少し不安になっていた。

「さあ、行ってみるか！」と、ことさら大声で犬たちにも語りかけながら出峰を下って、タツのすぐ上あたりの杉林に出た。「鹿ばかりだね」と小声で話していると、ヨシ号とブル号が鳴き出した。鹿である。杉林の上をガサガサと上に向かうようだったが、すぐに追い付かれ下に急行している。青木や千葉特有の葉の落ちない青藪で姿は見えない。

一番タツの真上である。「タツ注意、タツ注意。鹿だけど行きますよ」と親方に借りた無線機で知らせる。三分もしないうちに銃が鳴る。「獲れました」と満足そうな宮崎さんの声である。

私はその声を打ち消すように「詰め替えて。静かに……」と強い口調で伝える。私にしたら鹿など論外で、本音は犬たちのために撃ってほしくないのだが、このグループは今猟期から鹿の駆除隊にな

っており、鹿を獲ると喜ぶのである。

本来、千葉には小さい鹿しかいなかったが、増えすぎた大鹿に手を焼き駆除隊だけに許可しているのである。そんなグループでやる時でも、私は猪一本勝負と思っているのである。幸いなことに、私の犬群は私が決して鹿を追わないことを知っているので、鹿を出しても、待っていると二十分くらいで帰って来る。今日のようにそれを撃っても、ヨシ号もブル号も何事もなかったように五、六分で私のところに戻って来た。他の犬も付いて来たので、改めて一頭一頭に「よし、よし」と声をかけ、頭を撫でて、「よし行くぞ！」と小走りで次の小峰に導いた。

ここからの大峰はすべてマチを右下に見おろす大山であるが、左側はすぐ近くに国道があり民家もある。絶対に猪を左側に跳ばせるような狩り方はできない。そんなことを思いながら大峰筋を下っていると、猪の新しい食み跡があり、急に犬たちの動きがせわしくなった。

「さあ、出ますよ。ごっついのが……」。その時である。ラン号の見事な寄せ鳴きである。「しめた、止めたぞ！」の私の声と同時に、斉藤さんは「行きます！」と一声残し、ぶっ飛んで行った。やっとホッとして、「ラン号は寝屋止めだ。その調子、その調子」とニヤニヤしていると、ブル号とゲン号が鳴き出し、ヨシ号と富士美号まで鳴いている。

おやおや、これは大変だ。私に聞こえてくる全犬の鳴き声はラン号の寄せ鳴きによるものではない。明らかに個別の猪に付いた鳴きである。二、三頭だけではない。

「これはしめた。ついている」。私は興奮して思わず怒鳴っていた。「全タッ注意。タッの方注意。何頭もの猪が出たぞ！　犬に注意してお願いします」。これでよし。さて、どうやろうかと鳴き声を確認すると、既に追い鳴きは止め鳴きに変わっている。

突然、小川の二番タッあたりで銃が鳴った。早くも猪一頭ゲットの報が入る。こんなに早くタッにはまるとは思わなかったが、下りだからだろう。鹿を撃った以上に嬉しいらしく、盛んに言い放している。「詰め替えて……。静かにしろ！」と、私は前にもまして怒鳴っていた。

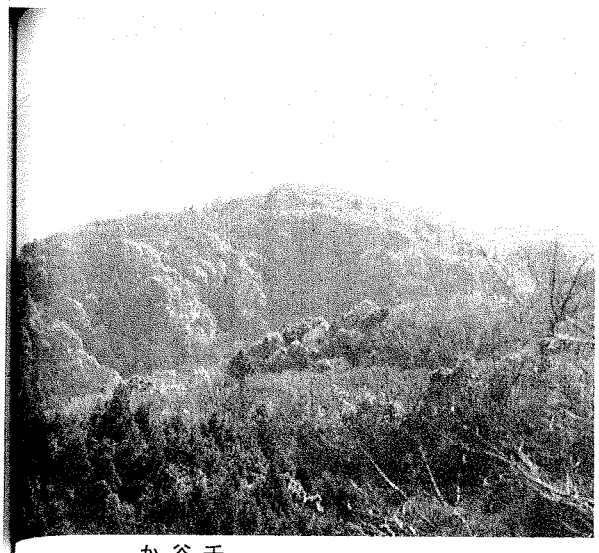
そして、気を取り直して落ち着いていただくために「何頭も出ているので、また行きますから頼みます」と全員に告げた。願ってもない犬群のがんばりであるが、このように何カ所かで止め切ってもらうために今日は七頭も放したのである。二頭は追って行ったきりで、それを見捨てての強行だったのに、五頭で三カ所の止めである。これまでも二カ所の止めは何回もあったが、三カ所はまれである。

「斉藤さん、とれますか。どうぞ」。斉藤氏はヨシ号とラン号の止めの現場に寄っている最中で、荒い息づかいで「どうぞ！」と返ってきた。

「もう、止め切っているから大丈夫ですよ。一時間くらいは動かないから、焦らず注意して近寄ってください」「了解！」

斉藤氏は一番遠くで止めているラン号とヨシ号に寄っているようだが、難所ばかりで大変だ。まるで馬の背のように、右下は二〇メートルも落ちている。そこからタッまでは、どの出峰も急斜面で足場も最悪だ。おまけに一面ツル草やボサが茂っていて見通しが悪い。

相変わらず犬群は元気で、完全な咬み止めの状態である。鳴き声が三カ所から響き渡り、にぎやか



千葉の猟場。見かけによらない急斜面やV字谷の藪と茂みで、良い犬でないと猪はなかなか物にできない

全犬が一気に咬みに入る。それでないと大猪は跳び続ける。100 kg 級をくぎ付けにできる見事な止めは、犬群の実力であり、技術である

なこと。

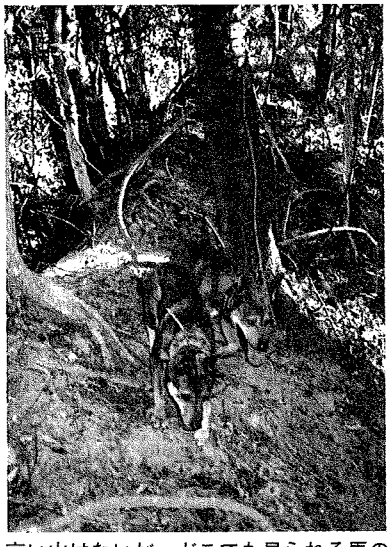
よし、それでは寄ってみるかと、すぐ下で止めているブル号とゲン号に近寄るべく、思い切って急な小峰伝いに下って行った。両側はどこも想像以上のきつい崖で、鳴き声はすぐ近くなのにどうにもならない。もぞもぞと、わずかに残る獣道を木の根やツル草にしがみつきながら、やっとのことで谷底近くまで来たのに、出峰は谷に一直線に落ちる前ひらのようで、どうしても寄れない。

犬たちが必死で止めているのだから、少しでも早く撃ってやる信用される主人にならねばという時に、まったくなっていない。落ちないように行っては戻り、また犬たちに寄る。

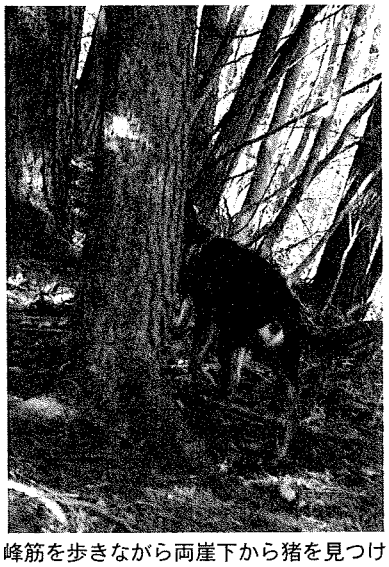
「焦るな、焦るな。必ず止めているから……」と自らを戒めながら一歩また一歩、落ちないように枯れヅルの茂みをかき分けながら、やっと鳴き声にたどり着いた。猪との荒い攻防音が目の前だというのに、何も見えない。地べたは空いているが、腰上は一面のツル草で身動きができない。

すぐ斜め上の崖崩れのあたりだが、ここからでは下からの接近だ。せめて横からでないと……気を取り直して少し戻って上に急行する。「よし、行くぞ！」と気合いを入れて足場を確保しながら進む。いつ飛び出しても撃てる状況でありたいのだが、猪にまくられなくても足を滑らせば谷底まで直行だ。その上、静かに寄るどころか、先ほどからバリバリ音の連続である。

すぐ先の小さな出峰の窪みのようなところでギャンギャンやっているが、立っても、腰をかがめても、どうしても見えない。ままよと銃を突き出し横から覗こうとした時である。まるで大岩が転げ落ちるようにバリバリと猪が跳んだ。「ドッドッドー」という大きな音と一緒に、ゲン号とブル号はギャッギャッと咬み下って行く。まったく姿は見えないが、いつものブル号たちの姿は目に焼き付いて



高い山はないが、どこでも見られる馬の背状の峰筋。成長著しい「一ノ矢」の若犬たち



峰筋を歩きながら両崖下から猪を見つけ出し、止め切れる犬でないと、この猟場では勝負できない（ヨシ号の狩り込み）

いる。犬たちは「逃がしてなるものか」と狂ったようにギャンギャン鳴き、咬み付いている。

普通こんな場合は、すぐ下の谷で、また止め切ってくれるのに、場所が悪すぎる。さすがの猪もストンと落ちる谷ではなく、急斜面の前ひらを下に向かって跳んでいるので止め切れず、どんどん離れていった。ここは一番、オレが撃ってやらねば話にならないのに残念だ。

しかし、そんなことを考えている時ではない。気を引き締めて「下ったぞ！　行きますから、犬に注意して頼みます」と告げると、流れる汗を拭き拭き、元の大峰へと登り始めた。

単独猟を信条とする私からすれば、この戦いは猪様の完勝である。千葉県以外の関東地方の猟場ならば、あの咬み止めで逃すことは絶対にない。今日は「――ならば……」は禁句にしていた。

「ゲン号、ブル号。許せ、ジジを……」。そんな思いをかき消すように突然、無線が飛び込んできた。「赤い犬が猪の背中に乗っかって来た。撃てない……どうしようか」と慌てている。「少し待てば猪を止めるから。落ち着いて少し待って。犬に注意して撃ってください」。続いて、銃声一発。「メスの良いものです」との報が入る。ゲン号も付いていて、二頭でやったのはいうまでもない。

それにしても、よくやってくれた。思えば、今日は発表会である。それを知っているかのように、先犬ゲン号に付いた一ノ矢ブル号は猟友にその芸のすごさを見せつけ、そして撃ってもらったのだ。「これでよし。上出来、上出来」と、ゆっくり登って大峰筋に出た。

ところで、ラン号とヨシ号はと、思い出したように無線をあわせる。まだまだ元気で戦っている。

「斉藤さん、とれますか。どうぞ」。斉藤氏も場所が悪く、難儀しているようだ。ただ、タツとは私以上に連絡を取り合って一生懸命である。すっかり止め犬に付いて上手になっているので、安心して見ていられるようになったが、念のために「猪はもう逃げられないから、焦らずにゆっくり寄って撃ってください」と告げる。ホッとしてドリンクを一気飲みし、一息入れる。

さて、それではと仕切り直しである。大峰筋を斉藤氏の後を追うように下り始めた。下の二番タツあたりでは二頭の猪を撃ったことで大騒ぎのようだ。気もはやってのことだろうが、「すぐ前の山で犬が猪を止めている。行って撃ちましょうか」と言ってきた。

無線を合わせると、何とそれは一ノ矢の牝の成長株、富士美号である。派手な鳴き声で止め切った四頭にかまけて富士美号を忘れていたが、こんなに長く止めていたようである。タツには「ダメだ。弾を詰め替え静かにしろ。何頭も出ているのだから、タツを絶対に離れるな！　止め現場には斉藤さんと私が寄るから……」と告げる。

それでは富士美号のところへ行くかと、シーバーを振り方向を探し、タツの知らせで見当を付けたところに向かおうと大峰筋を歩き出し、ハッと立ち止まった。三〇メートルくらい右下の三、四本の大杉の根元にひそんでいる「モノ」に気づいた。猪か？　それとも切り株か。黒い大きなモノが何となくこちらを見ているようだ。限りなく猪の大物だ。

しかし、大杉の下で暗いのでよく見えない。普段、このような場合はスコープの倍率をどんどん上げて見るのだが、千葉ではライフルは禁止である。今日持っているのは、使い慣れたブローニング五連にツァイス二十一倍ではない。仕方なく使っているベレッタ三連を思い切り握りしめ、いつでも撃てる態勢で、そろり一歩、また一歩。

ピクリとも動かない。確かこの辺りから子連れの大群が出たはずで、斉藤氏が今しがた大声を上げながら走り去ったところである。まさか大猪が残っているわけはない。

「だけど、猪だよなあ。よくある居残りの大物か？」。雑木の日向ならばよく寝ているが、こんな日陰にマジかよと、そろりそろりと六メートルくらい進み、モノの上で首を

伸ばし確認すると、あら不思議、木株が目にもとまらぬ勢いでぶっ飛んだ。「オオッ」、おったまげた私は調子を合わせるように二発を思わず撃ち込んだ。三発目をと思ったが、一五㍍くらいの見える範囲をあっという間に跳び、姿が消えた。

「しまった！　なんていうことだ」。とっさに我に返り大声を張り上げていた。「ヤーッ、ホイホイ、ホイ」「ヤーッ、ホイホイ」と怒鳴りながら大峰筋を一〇〇㍍くらい全力で走っていた。この峰を越させてなるものか。幸いなことに、大峰より一五㍍くらいは、それこそストンと落ちる崖であるため、大猪はどうやら下に向かったらしい。気を取り直し、「大物だ！一五〇㌔級がタッに向かったぞ！頼みます」

もうどうすることもできない。あんな願ってもないチャンスをものの見事に撃ち外したのである。悔しくて下で銃の鳴るのを待ったが、銃は鳴らず大猪の行方も分からなかった。仕方なく、猪が立っていたところまで下りて行き着弾を確認するが、一発目は分からない。二発目は、ちょうど大猪の首の高さの立ち木の幹が白く剝がれていた。高さはちょうどよいが、逃げられたのではどうしようもない。

マロ号もシロ号も、まだ戻って来ない。いつもならば銃が鳴ったり、私がこのように怒鳴り続ければ必ず駆け付けて来るのに、とうとう戻らなかった。

犬が付いていなければ、あんな大物がタッなどにむざむざとはまるわけがない。すっかりマロ号たちを当て込んでいたようだが、置き去りにしてきたのだから仕方ない。私は勢子に入っても勢子声（なり）などは一切出さず、俺流の静かな狩り方である。あくまでも犬たちが銃声や勢子声で邪魔されないためである。

それにしても、とっさの時には信じられない昔に戻るものだ。思わず田舎の山で兄たちにたたき込まれた、ウサギ猟や熊猟で覚えた勢子声を張り上げていたとは驚きである。

思えば、雪の中、カンジキを付け毎日のようにウサギの巻き狩りをやっていた。雪が多くなると犬は使えなくなる。犬の代わりに、小学三年生の頃から兄たちの後を追って鍛えられたのである。冬休みになると毎日である。

勢子声は追う物の動きをとてつもなく変化させる。上手な勢子声だと、ウサギは耳を寝かせ飛ぶように走り、タッにはまる。しかし、下手だと寝屋から出てこないものだ。なりが小さいと、必ずその人の間をついて戻ってしまうものである。

そういっては何だが、勢子声には自信がある。それでも犬猟でその声を使うことはない。あくまでも自分で覚えた俺流である。

すべて使っているものは失敗の中から編み出した。犬たちと自分の力だけで、簡単に猪の獲れる方法なのである。父や兄たちから大切な猟知識は嫌というほどたたき込まれてきた中で、負け惜しみではないのだが、第一番に大切なことを実行したための失敗が拾いもののチャンスを逃した、この実戦である。

銃を持つ者として、人に銃を向けるな。モノの確認のできない場合は、どんなに良いチャンスでもこれを撃ってはならない、とたたき込まれてきた。われわれ大物猟人は我欲のためや獲りたさのあまり、茂みでよく分からないのに発砲し、取り返しのつかない事故を起こしたなどは、実はあってはならないわけであるが、残念なことに後を絶たない。

モノの確認は、銃を持つ者の大原則である。私は父や兄たちの教えどおりに今日もきちっと守り、確認したのだからドンマイ、ドンマイ。

話が横道にそれたが、そんな意味では猪などいつでも獲れる。ましてや居残った猪で、誰の迷惑にもならない自分で見付け出したチャンスなので、逃げられて当たり前と思うべきである。自らそんなふうに納得。さあ行こうか。気を取り直し、「富士美号、待ってろよ！」。右下に広がる出峰を転がるように駆け下り始めた。もう二時間以上も経っているのに、まだ一頭でがんばっている。（つづく）